INTERVIEW

愛媛大学地域医療学講座 教授
川本龍一先生

地域の現場から「地域医療学」を築いていこう!

聞き手：山田隆司　地域医療研究所長

自治医大地域医療学講座での後期研修で学んだこと

山田隆司(聞き手)　今日は四国ブロック地域医療研究会に参加するため高松を訪れました．その研究会でご講演いただいた川本龍一先生にお話を伺いたいと思います．

まず，先生が卒業されてからの経歴を紹介していただけますか．

川本龍一　1985年に自治医科大学を卒業しました．愛媛県の８期です．卒後すぐに愛媛県に戻り県立中央病院で研修を受けました．スーパーローテート研修で麻酔科，小児科，外科，産婦人科，脳外科，内科をまわりました．私は内科を取りたかったので，２年目は内科の各科をローテートして最後の３ヵ月間は救急で研修しました．そして３年目に地域に派遣されました．その時派遣された先が現在も勤務している，当時の町立野村病院(現 西予市立野村病院)でした．それまでは地元の愛媛大学から医師が派遣されていたのですが，その派遣がなくなって自治医大に声がかかり，私が初めての内科医としての派遣でした．医師６人でうち内科が２人，病床は100床くらいで内科の入院患者は25人くらいでしたね．当直は月７回程度，のんびりとした病院でゆったりと過ごすことができました．

山田　３年目から何年間いたのですか．

川本　３年間です．通常２年ですが，もう１年いて欲しいと言われて３年いました．次に派遣されたのが，佐田岬半島先端の二名津診療所で２年間いました．

山田　愛媛県の場合は地域病院に行ってから診療所へ行くというスタイルだったのですか.

川本　今はそうなっていますが，当時は最初から診療所へ行く人もいました．診療所が９つあって病院は２つしかなかったので.

山田　二名津診療所のある地域は人口は何人くらいでしたか.

川本　1,500人ぐらいです．周辺には他に医療機関はありませんでした.

山田　先代の先生も自治医大卒業生だったのですか.

川本　違います．そこはかつてフィラリア症が流った地域でその撲滅に寄与した国保の重鎮の先生が33年間いらっしゃって，その後に行きました.

山田　前の先生が長く地域貢献された後ではやりにくいことはありませんでしたか.

川本　比べられるし，最初はやりにくい事もありましたが，要望にきちんと応えていく間に次第に信頼されるようになりました．色々な地域に出て行き，往診や健康教室なども始め，自分の活動する場が見つかって楽しく過ごすことができました．みかん農家が多かったため整形外科的疾患が非常に多く，局所麻酔を打ってくれという人が多かったのですが，他に何かいい方法はないかと考え，当時県立中央病院にあった東洋医学研究所に相談して，灸頭鍼をすることにしました．そうしたらすごく評判になって(笑).

山田　私も似たようなことを診療所時代にやりました．鍼を打って通電するという方法でしたが，同じように患者さんに評判になってしまいました(笑).

川本　佐田岬半島の根元の八幡浜というところからも患者さんが来るようになり，自分は鍼医者になるのか？と思いました.

ちょうど後期研修の話があったので，それをきっかけに灸頭鍼はやめられました(笑).

その診療所では，風邪の罹患や膝が痛いとすぐに注射をして欲しいという患者さんが多かったですね．そこにちょっと不思議なものを感じて，先生がされていたICPC分類で，どういう患者さんが診療所に来るのかというような調査をしました．そのデータをもって自治医大地域医療学講座に１年間後期研修として戻りました．その間に疫学を学びJMSコホートの立ち上げにも関わりました．その他は代診事業ですね．先生がいらした久瀬診療所にも実は行きましたよ.

山田　そうだったのですね．当時地域医療学の助教授だった奥野正孝先生が後輩の支援に力を入れてくれていましたね．教授の五十嵐正紘先生は当時から質的研究など先端的な研究をされていたし，先生はいい時期に大学に行かれましたね．１年間で収穫は多かったですか.

川本　そうですね．地域医療の現場には研究対象者が実はたくさんいて，目の前の身近なことが研究材料として大事だということを知ることができたので地域医療は面白いと思うようになりました．また，学生教育や研修医教育についても学ぶことができたので，ぜひ地域に戻ってやりたいという思いが強くなりました.